



TITLE:

<大會抄録>ブリヤートのラマ教

AUTHOR(S):

若松, 寛

CITATION:

若松, 寛. <大會抄録>ブリヤートのラマ教. 東洋史研究 1975, 34(3): 454-455

ISSUE DATE:

1975-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153586>

RIGHT:

中央政界に樞要なポストを占めた官僚である。しかし米芾は晩年でこそ書畫學博士の稱號をもらったが、本來官吏としては失格者に近く、自らもその活動の場を翰墨の世界に限った。外に發しては天馬空を行くような型破りの奇行となったが、内に沈んでは、書の實作においてまた研究において、熱烈な古法の探求者でもあった。それ故にこそ、彼は中國における最初の最も藝術家らしい藝術家になることができたと考えられる。

政治や社會という窮屈なわくにはどうもはまりきれない所があるが、藝術を至上のものと考え、それを實踐することにおいて誰よりも純粹にかつ大膽になることのできた稀有の人物であった。これはおそらく彼以前には見ることでできない新しいタイプの人間であり、ここに彼が近世の藝術史に占める大きな意義を見出すことができる。

米芾の祖先が西域「米國」からの歸化人であつたろうという説は、早く桑原隲藏博士によって唱えられた。米芾が生涯を通じて政治の表面に立たず、ひたすら翰墨の世界に身を沈めていったのも、そのような自己の出自に關する屈折した意識が、そのことをいさう促したのではなからうか。

今回の發表は、主として米芾の人と書を關連づけながら論じてみたい。また翁方綱の「米海岳年譜」の遺漏を補ったより詳しい年譜を當日配布する豫定である。

漢代皇帝支配の原理

好 並 隆 司

漢代における皇帝の人民支配にとつて、二十等爵制の占める意味の大きいことは既に西嶋定生氏によつて明らかにされている。その爵制は一面で、商鞅の軍功爵を繼承するものと考えられるから、この點を検討すると、知行制の面と官僚制の面とが、内在しており、漢初その矛盾が「功」の意味概念を擴大していった。そして後者の優位が明らかになるにつれ、基本的には田宅授與制は解消していく。しかしながら、爵に伴う田宅保有の考えは士大夫層の觀念に残り、吏民私有田の枠内の許容の原理となつたと思われる。前漢末、限田制の基準はおそらく爵制に伴うこの觀念の再現であらう。

右の報告趣旨を、漢代の徙陵邑による皇帝の齊民支配を介して説明するとともに、爵制的限田制が大凡如何なる標準をもつていたかを復原する作業の一端を明らかにしたい。

ブリヤートのラマ教

若 松 寛

ブリヤート族が帝制ロシア時代熱烈なラマ教徒であつたことは、我國でもよく知られているが、その實態については未だ十分に研究されていないようである。私はブリヤートのラマ教に關し、特にそ

の弘通の歴史に關心を抱き、この方面からいささか解明を試みようとするものであるが、今回は、ブリヤートルマ教界の長バンディダー・ハンボラフ *Bandida mkhanpo blam-a* の成立過程に焦點をあてて述べてみたい。

ハンボラマ初代と目されるゲンドゥン・ツェテン・パダル・ギェ・ザ・ヤ・エフ *Dge ldun bstan pa dar rgyas Zaya-yin* は、一七二一年、セレンガブリヤートのツォン・ゴル氏に生まれ、長じてチベットへ赴き、レボン寺のゴマン學院で修業し、一七四〇年歸國した。翌年、その手によってブリヤート最古と稱されるツォン・ゴル廟が建立された。この年には、後にハンボラマの常住所とされたグシー・エ湖廟も、ハタギン氏のジム・バ・アガル・ダ・エフ *Jimba Ayaldai-yin* によって建立されているが、これにもザ・ヤ・エフが關係を有している。ザ・ヤ・エフは一七六七年、エカテリーナ二世が召集した法典作成委員會に出席して、ディプ・タートル・ハンボ *Diputad mkhanpo* の稱號を授與され、後一七七七年入寂した。一方、ジム・バはイル・クツクの印務處からバンディダ號を授與されたが、ザ・ヤ・エフの死後、そのハンボ號を繼承して、バンデ・ヤ・ハンボと號するようになった。これがバンディダー・ハンボの成立であり、それは一七八〇年のことであつたとおもう。

モンゴル帝國の對外文書について

海老澤 哲雄

モンゴル帝國の對外文書に關しては、すでに E. Voegelin の研

究がある。それは、一二四〇年代から五〇年代にかけてブラノッカルビニなどの修道士が西歐にもたらしたモンゴル側の文書を考察したものである。その研究によると、モンゴル側の文書には、モンゴル帝國は、實際には未完成であるが、神の命により、地上を獨占的に支配する國家であり、地上の國は、すべてそれに服屬すべきであるという論理が見られるという。

本報告では、先ず、一二四〇年代以前の、部分的・間接的に傳えられているモンゴル帝國の對外文書について考察し、右の Voegelin の所説を補強したい。

次に、一二四八年、ルイ九世に届けられた文書を取り上げる。當時、王は十字軍遠征のためキプロスに滞在していた。そこへ、小アジアなどの統治を委任されていたモンゴル部將エルチギティの使節と稱する者が訪れ、その部將の書簡なるものを渡した。それは、懇懃を極めた、キリスト教色の濃い、友好的な内容の書簡である。モンゴル帝國がさきのような論理をふりかざした服屬要求の文書を諸國に送っていたとすると、このときに限り、友好的な内容のものが送られたのは、どう理解すべきであろうか。この點について、P. Pelliot や J. Richard の所説を検討しつつ考察したい。

ウシュル・ウシュール・アーシャー

嶋田 襄平

(一) 'ushr は「十分の一」を意味するアラビア語であるが、イスラム法の用語としては、ムスリムに課せられた救貧税のうち土地所有